

「救援関西」発足22周年の集い

チェルノブイリとフクシマを結んで、支援・交流を考える

☆プログラム☆

* 基調報告：今年の取り組み／来年の取り組み

* 報告と討論：

1) UNSCEAR (国連科学委員会) WHOの福島事故健康影響評価報告の批判

・フクシマ被災者支援と結んで何ができるか

・チェルノブイリ・ヒバクシャとともに国際連帯の取り組みは

2) 「福島県民健康管理調査」での小児甲状腺ガンをどう考えるか

* その他



◎ バレエ「怒りにふるえて」：ダンスコアポシブルの皆さん

[チェルノブイリと福島の被災者]

～フクシマ事故の被災者に思いを馳せながら、万感の思いを込めて～

△ バザー：福島支援の物品・マトリョーシカ・手作りケーキ 等



日時：2013年12月23日(休)

13時30分～16時30分

場所：クレオ大阪中央 セミナーホール

地下鉄谷町線「四天王寺前 夕陽ヶ丘」駅下車

① ② 番出口から北東へ徒歩3分

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問い合わせ先：0797-74-6091 (たなか) 072-253-4644 (いのまた)

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

＝「救援関西発足22周年の集い」での報告の予告＝

「国連科学委員会」等のフクシマ事故の被ばくと健康影響の過小評価を許さない 「福島県民健康管理調査」小児甲状腺ガン・疑いをどう考えるか

昨年来、WHO と国連科学委員会(UNSCEAR)が、フクシマ原発事故の被ばくと健康影響評価についての報告を出しました。また、国際原子力機関(IAEA)、国際放射線防護委員会(ICRP)も事故後、いくつかの報告や声明を出しています。これらは基本的に、事故を起こした責任を認めずに原発維持・推進を続ける日本政府の不十分な事故処理対策や被ばく低減策、被害者の健康管理・調査と支援策の切り捨て等を、国際的に支持する内容となっています。このような動きは、チェルノブイリ事故後に、IAEA を中心とする国際勢力が、チェルノブイリ被害を過小評価し、被害者支援を遅らせたのと同じような危険な策動です。これは原発重大事故が起こっても、市民や労働者に被ばくを押し付けて、原発推進を続けようとする国際的な原子力産業と諸政府の思惑に沿ったものです。私たちは、チェルノブイリとフクシマを結んで、これらのひとつひとつを、被害者とともに批判し、跳ね返してゆかねばなりません。

12月23日の「救援関西発足22周年の集い」では、特に今年为国連総会に向けて準備された「国連科学委員会」による報告「2011年、東日本大震災と津波の後の原発事故による放射線被ばくのレベルと影響」に焦点をあてて、批判的検討を行いたいと思います。「国連科学委員会」は、ガンなど、フクシマで将来起こりうる

健康被害について、「10mSv以下の低線量の被ばく集団のガン罹患の推定には」「しきい値なし」との考えを用いるのは「注意すべきだ」とするなど、低線量被ばくの健康影響の過小評価をしています。そして、被害者の精神的ストレスの健康影響を強調し、被ばく低減策がかえって健康に悪影響があるとしています。また、100mSvを越える被ばくをした労働者のグループですら、「将来、ガンリスク増加が予測されるが、増加したとしても、ガン罹患の通常統計の変動に対して、そのような小さな増加を認識することはできないだろう。」として健康被害を切り捨てています。詳細な検討は、「22周年の集い」で報告したいと思います。そして、フクシマとチェルノブイリの被害者と支援者、脱原発に取り組む国内外の多くの人々とともに、このような国際的な動きに対抗する取り組みを行えるよう、皆さんと議論を深めたいと思います。

あわせて、「福島県民健康管理調査」で中間報告がなされている、福島県の20万人余の子ども達の甲状腺超音波検査の「悪性ないし悪性疑い59例」について、現時点でどのように考えられるのか、今、何が求められているのか…「救援関西」として、フクシマ支援をする立場から報告し、皆さんと意見交換したいと思います。「22周年の集い」に、どうぞご参加下さい！



現地の都合により年内のベラルーシ訪問を延期しました

来春までには訪問し、フクシマの実情も伝えます

引き続きチェルノブイリ支援へ、ご協力お願いします

今年も12月初めに、皆さんからの支援カンパを届けにベラルーシの被災地を訪問する予定で、9月頃から準備を進めていました。通訳でモスクワ在住の松川直子さんが、クラスノポーリエの小児科医ベーラさんと連絡を取ってくれていました。9月末に、松川さんが伝えてくれたベーラさんたちの近況は下記でした。(以下、9月23日の松川さんからのメールより。)

ベーラさんたちは変わりなく過ごしているそうです。

ベーラさんはとうとう小児科医としての現役を退きました。でも、まだ時々患者さんから電話がかかってくることはあるそうです。夫で歯科医のニコライさんは、今年中は仕事をするそうです。孫のカーチャは大学4年生。車の免許を取る準備をしているそうです。その方が就職に有利だからだとか。

クラスノポーリエでは少子化が進み、町の規模がどんどん小さくなっているため、行政機関の人員削減がどんどん進んでいるそうです。特に今年、構造改革があり、人員削減がありました。行政機関だけでなく、病院や学校などでも人員の補充が全くなく、学校では先生の負担が増えたそうです。ただし給与も少し上がったとのこと。

病院では小児科の先生が、ベーラさんの後は常勤がおらず、一人「出張扱い」の先生がいるだけだそうです。専門医（皮膚科、神経科、耳鼻科）の先生がいないため、そのような診察を受ける人は近隣の町、チェリコフ、チェスチコヴィチなど、時にはモギリョフに行く必要があるそうです。今年は病院の5年に一度の監査の年で、3週間程度、さまざまな監査を受けるため、かなり大変だそうです。

「プリユート」（困難な家庭の子どもを一時保護するための社会福祉センター）も変化なく活動をしています。夏は毎日、子どもを受け入れ、子どものサマーキャンプの様な活動をしていました。障害者リハビリセンターも変わらず活動しています。ソーンシカ幼稚園も変わりありません。

クラスノポーリエは街の規模がどんどん小さくなり、毎年「市」のステータスが残るか、降格されるかということが議題に上ります。今年は大丈夫だったが、いつ降格されるかわかりません。町の経済社会状態はあまりよくなく、人員削減にみられるように、働く場所がどんどんなくなっています。特に大学を卒業した若い人々が働く場所がないのです。

クラスノポーリエでもテレビや新聞などでフクシマのことが報道されますが、情報は少ないです。でも、状況はよくないということは報道されていますので、ベーラさんたちはとても心配しているし、実際の状況を知りたいと思っているとのこと。

8月末から9月の初めに、日本のどこかの調査団がベラルーシに来て、チェルノブイリの事故後のことについて調べにきたことが報道されていたとのこと。また、日本から子どもたち、福島の子ども達かもしれませんが、15人くらいが保養にきて、ミンスクの近くの「ナールチ」という保養地で過ごしたと聞いたそうです。

ぜひ、振津さんがクラスノポーリエにいらしたときには、人を集めて、フクシマの現状について話してもらいたい。集める人は、病院関係者か、教育関係かなど、少し考えますが、そういう機会を持てるとありがたいと思うとのこと。

10月1日は街のドイツ軍（第二次世界大戦時）からの解放記念日で、いろんな催しが企画されているとのこと。街のいろんなところにブースが出て、各機関が何かを出展します。例えば、病院、学校、幼稚園などで、手芸品をだしたりするのです。お芝居やコンサートも企画されているので、みんな楽しみにしているそうです。

ところが、先日11月初めに、ベーラさんの夫のニコライさんが脳梗塞で倒れ入院したとの連絡が入りました。ニコライさんは一週間ほど意識が戻らず、ベーラさんも病院で泊まり込みだったそうです。少しずつ病状も回復に向かいつつあるようですが、これからリハビリに進まねばなりません。このような時期に私たちの訪問を受け入れて頂くのは無理ですので、年内の被災地訪問を延期しました。ベーラさんは、「関西や福島の皆さんに、くれぐれもよろしくお伝え下さい。いつも皆さんのことを思っています。」と、言われていたそうです。このような大変な時にも、私たち日本の友人のことを忘れていてくれていることに感謝しています。そして私たちもニコライさんの快復を心から願っています。

引き続き現地との連絡を取りながら時期をみて、来春までには、現地に皆さんからの支援やメッセージを届けに行きたいと思います。またフクシマとチェルノブイリとの交流をさらに深められるよう、皆さんとともに準備をしたいと思います。引き続き、ご協力をよろしくお願い致します。

(ふりつ)

大地震・津波、そして原発重大事故

～福島県いわき市からの避難者の体験を聞く～

3. 11から2年半。事故原発は全く収束の目処が立たず、被災者の救済・被災地の復興はまだ遠いのが現状です。しかし一方で被災地から離れるほど被害への関心は、薄れつつあります。関西の地ではどうでしょうか？

2013年11月2日土曜日、遠藤雅彦さんのお話しを聞く会を持ちました。

福島県いわき市で地震と津波に遭い、家族と命からがら高台に逃れ、避難所で東電福島第一原発の爆発を知った遠藤さんに、その日起こったこと、その後の避難生活、そして被災者支援・復興のため「一般社団法人東日本大震災復興サポート協会」を設立し活動してきたことなど、その思いを語っていただきました。

報道写真に津波に飲み込まれる遠藤さんの自宅が移っていました。まさに死と紙一重の自然の脅威、そして人為的に隠され人々を傷つけ翻弄する原発事故の不条理。自分や自分の家族が「災害に遭うということ」とはどういうことか。今いちど考える機会となりました。

1) 地震と津波：自ら身を守ること

【3月11日14時46分】

たまたま外に出ようとして、突然襲った地震に、門のドアノブを握ったまま動けなかった。ドドドドドと止まらない。家の中の母と祖父が心配だったが助けにも行けず、振り向くこともできず、ただ耐えるのみであった。後で確認すると3分10秒だったが、ずっと長く感じた。池の水が渦を巻いて飛び散っていた。



【19分間】

その時はまだ電気もついていてテレビも見ることができた。震度6強・大津波警報が出ていたので逃げることを考えるが、余震は続いており、家の方が安全ではないかという考えの人も多かった。祖父は逃げないと言う。自宅は海のすぐ近くだったので、海を見に行ったら海はまったくふつうであった。海の奥の方で雷のような音が聞こえた。海岸に地割れが走っていた。地域の防災活動で、防波堤に高波対策の板を差し込む役割があったので、それだけ済まして、財布とジャンパーだけ持って、家族と車で出発できたのは15時5分であった。地震発生から19分経っていた。大阪の防災マニュアルでは10分で逃げることになっているが、逃げることを決断した場合でも、「すぐ」といっても最低それくらいはかかる。

【混乱・犠牲】

地震直撃の後、多くの人々は、道をふさいでいる倒れた塀を片づけたり瓦を拾ったり、工場や自宅を見に行ったり、子どもの安否を確認しようとした。中断した犬の散歩の続きをした人もいた。今振り返れば、頭を切り替えることができるかどうかだが。また、動くにしても情報と判断が必要だった。津波の情報を聞いて、山手のカントリークラブへ向かった人もいたが、渋滞に巻き込まれた。15時08分（地震から22分後）に津波第一波、15時40分（第一波から30分後）第二波が到達し、地区では500戸～600戸が流され、老人を中心に多くの犠牲が出た。海に近い小学校・中学校も直撃を受けた。豊間地区だけで85名が亡くなり、8割が流出した。

【決断】

決断に至ったのは、「何かあったら遠くへ逃げなさい」という亡くなった祖母に昔聞いた言葉であった。避難を決断できるような教育・地震と津波についての教養・避難準備を優先した行動が、身を守った。

【濁流に呑まれる車】

逃げるとなると、福島は県自体が広く、山や川で隔てられており、面積はいわき「市」だけで大

阪「府」に近い大きさで大変であった。その上道路は至る所で寸断されている。海岸線からどちらへ逃げるかも課題であった。ネットとカーラジオの情報を得ながら、一旦海に近づいてしまっても、できるだけ広い道を選びながら車を走らせた。携帯は不通になったが、公衆電話があったので、消防署に問い合わせると「避難所は自分で探してくれ」と言われた。進行方向に、津波が川を逆流するのを見た。200メートル前の車3台が橋と共に黒い濁流に呑まれた。10秒ほど動けなくなったが、留まることと進むことのリスクを考え、引き返して道を変え、もう一段上流で同じ川を渡る。津波に遭わなかった地区も夕方にはコンビニから食べ物がなくなり、道路は海から逃げる車でいっぱいになった。なんとか隣の学区の小学校に避難した。

【避難所】

12・13・14日。1時間30回も余震が続く中、避難所で津波を初めてテレビで見た。電話がしばらく繋がらなくなり、いわき市を出るまでツイッターにも接続できなかった。連絡方法は張り紙だけであった。近隣の商店から米やパンを提供してもらい、ボランティアを募ってプールからトイレの水を汲む役や、ゴミ担当を決めて自ら助け合った。避難所も色々で、被災者の自主的な助け合いがなく一方的に世話になるだけの避難所は不満が多く担当者は疲れ秩序が保てなくなるところもあったと聞く。津波を避けて自宅から原発方向に避難していたのだが、いわき市の避難所では放射能の情報は皆無であった。

2) 原発事故：放射能からの避難

いわき市→郡山市→宇都宮市→東京→大阪

【友人からの一報】

3月14日未明、友人からの一報を受ける。友人の知人の東電社員の家族から得た情報で、その家族は100km圏外に避難するために長野へ避難するところだったと言う。カーラジオでは原発から10km～15kmの避難のことしか伝えておらず、ここからは何を信じるかという問題。友人は「一緒に逃げよう」と言ってくれる。3月15日朝の時点でいわき市は、空間線量が6 μ Sv/hあったがその時は分からなかった。

【郡山で見たもの】

14日朝6時半出発でいわき市から郡山市に避難した。ここでは前の避難所では見なかった「防護服」を着た自衛隊や白衣の職員とふつうの市民が生活している奇妙な日常風景があった。避難所に入るときには全員放射能のスクリーニングを受ける。スクリーニングで自分の体から放射能の反応が出たことにも驚いたが、限度量の3倍以上の被曝をしたカメラマンが強制的な除染を受けているのを見て、大変なことが進行していると理解した。自分たちのような海からの人を警戒しているようだった。周囲への連絡を取るが、福島で起きていることや避難の決め手になった情報を話しても、信用して聞いてくれた人と聞かない人にはっきり分かれた。「放射能の影響は少ないはず」「そんなもの(ネットに)載ってないよ」と言われた。11時3号機爆発。14時に友人と合流し、栃木の宇都宮市へ4時間かけて避難を続けた。

【被災地の生活】

避難する人もいるし、自治体の情報を信じる人もいる。危険承知で「ここで自分が避難すれば餓死が出る。自分で決めた人生だからしょうが無い」と残る卸売市場の若社長や、「逃げたらもっと多くの犠牲がでるのが分かっているから」と言う人もいた。いわき市民は被曝し続けながらも、ラジ

オで開いているスーパーを聞きつけて食料を買い付けた。

何を信じたら良いのか？誰の言った情報なのか自分できちんと判断することが重要。地縁や血縁を超えた信頼関係がお互いを助けた。

【大阪に着いて】

30 km避難、100 km避難、300 km避難、静岡でも危ないと情報が次々と変わり、郡山から栃木、栃木から東京へと避難した。途中で買ったスエット上下と、たまたま持ち出したダウンジャケット一枚だけで、ひげも剃らない恰好で、避難5日目に大阪に着いた。怪しまれ、汚い者のように扱われた。

(関西は被災地の状況とはかなりギャップがあったためと理解している) 関西の多くの友人・先輩・後輩・恩師に助けられた。友人の母よりギャラリーの手伝いをさせていただけることになり居場所を得る。

【語り伝える】

まず、状況を理解しなかった。5月にウクライナ領事館へ問い合わせ、チェルノブイリを経験した方に事故の状況について尋ねた。プルトニウムが危険なこと、空間線量で $0.3 \mu\text{Sv/h}$ 以上の環境で生活していると健康に何らかの影響が出るので注意した方が良いとのアドバイスを受ける。また原子力の専門家から事故の収束には50年かかる旨を聞いた。まずは、体験した出来事を伝える活動を始めることにした。

【被災者が孤立している】

9月に同じく福島から関西に避難した高野正巳氏と出会い、福島の置かれている状況、原子力災害が人と人のつながりを断ち切ってしまうことについて相談するようになった。避難者の孤立を防ぎ互いの自立をめざして問題解決の仕組みを作っていく団体「関西福島県避難者連絡相談会」をたちあげ、ネットワーク形成に努めた。11月には被曝医療に携わってきた村田三郎医師の健康相談、被災者避難者向けの内職「まけないぞう」をNGO協働センターと共に紹介するなどを実施し始める。地元でも避難先でも被害の格差、保障の格差・アンバランスが人間的な復興を妨げている。

東北の時給を知っていますか？時給800円～1000円/h。58才、月20万円でも、持ち家・庭付きで車が3台というのが普通な環境。そんな中で、たとえば20kmからの避難者と津波の避難者は補償額が全く違う。もともと現金収入は少なくとも、広い家で穏やかに暮らしていた生活だったので、月一人10万円の補償金が入った人は(4人家族で40万円)無理して家を建て借金を背負ったり、一方は以前と同じ程度の収入でも家と畑を無くしてすべてにコストが発生する生活では暮らしが成り立たなくなっていたりしている。公共事業は止まり、住宅も家賃も高騰している。避難している人は、親戚の家に2年半、母子避難して二重生活が2年半、皆、すでに限界になっている。

【事業として】

2012年2月に今までの実績を基礎に、福島県大阪事務所の推薦を受けて、内閣府の地域共同モデル事業(福島県地域づくり総合支援事業)へ応募し、2013年4月より、一般社団法人「東日本大震災復興サポート協会」を設立し、震災からの自立支援を避難・居住・帰還のあり方に基づいて活動を開始している。

- ・避難者ネットワーク強化：・交流会
- ・自立支援：・法律プロジェクト
- ・健康診断・健康相談

- ・福島と繋がった活動（被災を伝える活動を含む）
 - ・福島訪問者アテンド
 - ・地域のお祭りでのブース出店
 - ・被災経験を語る講演会 等

【これからとお願い】

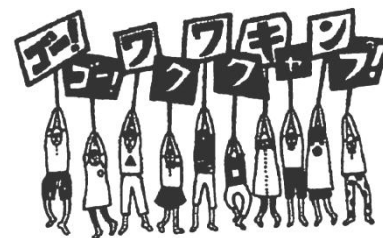
県内被災者と県に戻ってきた人、避難している人をつないでいく役割を担っていきたい
 サポーターを増やし、県外の人とも繋がっていききたい
 診療や相談・その他よく話し合い、被災者のニーズを理解したフォローをお願いしたい
 フェイスブックに「いいね」をクリックしてもらうことで、100 円のカンパになる
 災害について知ってもらい、地域の人々にも役立ちたい

いつもいろいろ福島のことを教えて下さったり、ほかの被災地の方の相談をされたりしている遠藤さん本人が、このような怖い体験、辛い体験をされていることは、よく知りませんでした。ご自分の生活だけでも大変なのに、事業まで立ち上げて取り組んでおられること、頭が下がります。地域での防災や啓蒙の機会を作って紹介する等のサポーターはできるかもしれません。クリックもできそうです。忙しいときの雑用のボランティア・・・お知らせ下さい。これからも応援しています。
 (ゆみ)

「またね！」と笑顔の別れ

2013 年「夏の家」無事終わる！！

来年もまた「キャンプ」で会いましょう！



「ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ」におきましては、温かいご支援とご協力をいただき、本当にありがとうございました。おかげさまで2013年「夏の家」を、無事終えることができました。

今年のキャンプは7月26日から8月28日まで、福島県、茨城県、宮城県といった地域から、総勢44名のこどもたちと、21名の保護者の方々(送迎のみの参加も含む)を受け入れました。今年も、多くの方が出来るだけ参加しやすいように、年齢や地域を限定せず、また参加期間もいつ来てもいいという形にしました。1歳の赤ちゃんから

高校2年生まで、多い日には手伝ってくれる人、参加者を合わせて50人近い人達が、「南丹交流の家」で寝食を共にしました。こどもたちの大きな病気やケガもなく、楽しくにぎやかな日々を送ることができました。

毎日のブログでも報告させてもらったとおり、土偶づくりやピアノコンサートなどのイベントや毎年恒例になっているBBQや流しそうめん。また、近くでの川遊び、プール、朝の散歩、ご飯づくりなど多くのことをこどもたちとともに楽しむことが出来ました。



放射線量の高い土地では、外で遊ぶこと、自然や土に触れることもままならない状況となっています。「ゴーワーク」での体験が、自然からの恵みや、食べることで生きることへの意識を深めるきっかけとなれば、と思います。

参加されている方たちは、楽しみな気持ちだけではなく、現地での不安な気持ちもたくさん抱えながら参加されています。

原発事故・震災から2年6か月以上経ち、現地では、「被ばく」や「保養・避難」といった言葉を出すことは困難な状況になっています。現地でも、移住先でも、こどもたちは生きづらさを抱えています。

まだ、終わっていないということを知っていただくためにも「ゴーワーク」を含む私たち保養キャンプ団体が保養を続けていくことが必要だと感じています。

手伝ってくださる人は、昨年関わってくださった方だけではなく、今年初めての方も含め約100名の方に来ていただき、子どもたちの見守りや食事作り、掃除、洗濯など、生活を共に作っていただきました。お手伝いを申し出てくださったみなさま、本当にありがとうございました。

また、地域の方との交流もあり、去年に引き続き地元の小学校がプールを貸して下さったり、夏祭りに招待していただいたりと、とてもこどもたちのことを気にかけてくださいました。



今年も報告書を発行し、こどもたちの様子や、成果・課題など、みなさまと共有していきたいと考えています。

震災、原発事故から2年以上経ち関心の薄れていく人も多いなか、みなさまの温かい思いに支えられて、今年もキャンプを実現できたことを、本当に感謝いたします。

どの子も、涙のお別れかと思いきや「またね！」と笑顔で帰って行きました。参加した子どもたちとその家族とのつながり、そしてみなさまとのつながりを大切にしながら、また来年キャンプで会えるように、頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、昨年、一昨年に引き続き手伝ってくれる人の医療講習会や参加していただいた親御さんのメディカルチェックなど「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」のみなさまには多くの支援をいただきました。

今後とも、みなさまのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

ゴー!ゴー!ワクワクキャンプスタッフ一同

(＊9月に投稿して頂いたのですが、ジュラブリの発行が遅れてしまい大変申し訳ありません。)

【山科さんのお話】

絶対に戦争をしちゃダメよ!

5月31日、山科さんは富田林第一中学校でご自身の被爆体験を語られました。富田林第一中学校とは語り部活動を通じて20年来のお知り合いで、今回も、3年生の長崎への修学旅行における事前学習として依頼され、お話をされました。学校に着いた時は何人もの先生が出向かえてくださり、付き合いの長さが伺われました。

会場の体育館には、すでに、いつも資料として持ち歩いている、パネルがズラリと並べられて準備されていました。原爆投下当時の焼け野原の街や被爆者の痛々しい姿の写真などです。生徒たちはまずそのパネルを見ることから始まりましたが、皆さん、真剣に順番にパネルを見ていきます。その後、山科さんのお話が始まりました。「私の話は先生方もあなた方のご両親もご存知ないこと、家に帰ったらお父さん・お母さんに話ししてあげてね。」と語りかけます。パネルの説明も加えながら山科さんのお話はだんだんと熱を帯びます。



長崎原爆により両親・兄弟を失って独りぼっちになったこと、焼け跡で何日も家族を探して寝起きしたこと、焼け野原の街の様子等等。その後、必死で生き抜いて語り部活動を始めます。そしてアメリカの高校で原爆の話をした時の事、「原爆はそういう悲惨なもの知らなかった。和子が話してくれて良かった。」と言われて、涙が出てきたとも話されました。原爆の恐ろしさ・悲惨さと語り伝えねばと言う山科さんの強い思いがストレートに伝わりました。生徒たちは皆熱心に聞き入っていました。話のあと、感謝の気持ちを込めて生徒から大きなお花がプレゼントされました。疲れが出るのではと言う心配をよそに山科さんは「若い人からエネルギーをもらった。」と至極お元気。語り部の大ベテランとシャッポを脱ぎました。語り部の方も高齢化し「あまり語れる人がいない」という現状の中で、語り部活動に情熱を注ぎ続けている山科さん、本当に頭が下がります。

山科さんは子どもたちに語る時、いつも三つのことを言われるそうです。

- ・絶対戦争をしちゃダメよ。
- ・外国の言葉を覚えてね。英語でなくても何でもいい。それによって相手の気持ちが通じるから。
- ・一度は外国に行ってみてね。

絶対戦争をしてはいけない、いかに平和が大切かという強い思いとともに、そのためにも日本だけではなく広い世界を知って欲しいという心からのメッセージです。 (いのまた)

(山科さんをご高齢のために事務局住所を変更しました。引き続き代表をお願い致します。)

関西電力に対する申し入れ行動に参加しました。

11月5日、他の市民団体と一緒に「10・26反原子力の日」に際しての申し込みと緊急質問状「10・26反原子力の日に際して、9電力社長懇談会マル秘文書『日本原電への支援について』に抗議し、緊急質問状への回答をもうしいれます」に対する回答を求める交渉に参加しました。交渉には30名が参加しました。関電側は「回答する立場にないので、回答を控えさせていただく」と何も答えません。皆、怒り心頭で追求しましたが、どれだけ突っ込まれても何を言われてもかたくなです。今までの自らの回答と矛盾しているという明白な事実を突きつけられても、何も答えず、しらを切り通すその関電の態度は本当に呆れ返るばかりのものです。挙げ句の果てに時間が来たとサッサと席を立つ始末。何としても「受電なき電力料金」を徴収して日本原電に渡し、延命させようとする関電の責任を問い、そして原発の再稼働をやめさせよう。

2013年11月5日

「反原子力カディ」に関する申し入れ

関西電力株式会社 社長 八木 誠 様

原発は一度重大事故を起こせば、人間社会や自然環境に及ぼす被害は計り知れず、取り返しがつきません。そのことはチェルノブイリ原発事故、そして福島原発事故が事実で証明しています。

チェルノブイリ原発事故から27年が経ちますが、被災地では今も放射能の中で放射能と闘う生活を余儀なくされています。放射能汚染と被ばくは、さらに次の世代までも続きます。私たちが支援・交流を続けているベラルーシの汚染地では、被ばくの影響を少なくするために、子ども達は今でも汚染地外での保養に出かけています。食品は全てモニタリングされ、放射能濃度が基準値を超えた食品は規制されています。住民の健診も毎年行われ、健康状態が登録・管理されています。事故後、甲状腺癌を含む甲状腺の病気が増え、全体的に心疾患・肺・泌尿器等様々な子どもの発病率が増えました。できるだけ被ばくを少なくすること、そして健康を守る努力が今も続けられています。

福島事故から2年8ヶ月が過ぎようとしていますが、未だに15万人が避難を余儀なくされ、先の見えない不安定な生活を強いられています。「原発事故さえなければ」「元の生活を返せ」は被害者の心からの叫びです。除染は進まず、被害者の救済は殆どなされていません。さらに数百万人が「放射線管理区域」レベルに汚染した(2011年当時)地域で暮らしています。福島事故は収束していません。高濃度の放射線のもとで大量の被曝をしながらの必死の作業が続けられていますが、汚染水問題は解決策もみえず、放射能は海に漏れ出し、垂れ流されています。また大地震などで炉内にある溶融核燃料塊の冷却ができなくなれば、セシウムな

どが蒸発し再度大量に放出される危険があります。

貴社はこのような現実から目をそらし続けています。大飯3・4号炉、高浜3・4号炉の再稼働を申請し、電気料金の値上げを行い、原発を維持しようと必死です。そうではなくて、チェルノブイリ・フクシマの経験に真摯に学び、多くの国民の「原発ゼロ」の声に耳を傾けてください。事故を前提とした原発推進など許されるものではありません。これ以上のヒバクによる犠牲は決して許されません。

現在すべての原発が止まっています。このまま原発の再稼働を断念し、すべての原発を廃炉にしてください。原発から再生可能エネルギーへ転換してください。

「反原子力」にあたり、以下を申し入れます。

- ・大飯3・4号炉、高浜3・4号炉の再稼働を断念し、申請を取り下げてください。
- ・貴社のすべての原発を廃炉にし、再生可能エネルギーに転換してください。
- ・発送電を分離して電力の完全自由化に協力してください。
- ・日本原電への支援をやめてください。

以上

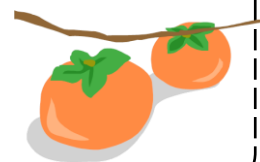
カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2013.7.21～2013.11.24)

大久保利子 都藤清美 福岡いさこ 大月良子 富田洋香 小谷美智子 山本康素子 奥平純子 佐藤ちい子 吉田信子 馬庭京子 尾上照子 相沢一正 松田光代 井上和歌 吉崎恵美子 森重子 大野ひろ子 奥平純子 川原重信 馬庭京子 東野セツ 高木祥伍 原発の危険性を考える宝塚の会 鹿間佳子 このゆびとまれ 中川慶子 木下桂子 鎌橋照子 齋藤充子 野中マサ子 宮島臣一郎 木村英子 大津定美 振津かつみ 田中章子 久保きよ子 長澤由美 猪又雅子
(順不同・敬称略)

カンパ・会費納入のお願い

いつものお願いで大変恐れ入りますが、カンパ・会費の納入をよろしくお願い致します。「救援関西」は皆様の力に支えられています。なお、すでに納入頂いている方には重複をお許し下さい。また次回から送付の必要のない方はご一報を頂ければありがたいです。



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

0722-53-4644

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西